

沖

俳句雑誌[おき]

9月号

沖 発行所

楽譜碑

能村 研三

夏果つる炎を入れし鍋返し

気迷ひの山の天気や野分立つ

直立の大き木の下盆送り

出しそびる葉書一枚つくつくし

市川市とパトナーシティの関係にあるドイツのローゼンハイム市の友人から日本語に訳されたメールが届いた。八月の初旬にローゼンハイム市長を団長とする二十四名の訪問団が市川へ来ることになったが、その一員として現地でレストランを経営するトニーケートからであった。その内容は、個人的なもので訪問団は市川を視察の後、名古屋のトヨタ自動車と京都を訪ねる行程であったが、トニーは一人で富士山に登りたいのでその手配をしてほしいとのことであった。

富士山に私は三回登ったことがあるが、四十年以上前の若い時で、いずれも夜から登り始めて頂上でご来光を拝み、お鉢めぐりをした後「砂走り」で一気に駆け降りるコースであった。

そんな経験もあり私は富士山には登らないものの、麓まで案内をしてあげる旨をメールで返信した。

トニーはその返事に大変喜んでくれた。しかし、私はドイツを四回ほど訪ねてはいるもののドイツ語は全くといってよいほど喋れず、英語の会話も駄目である。そこで、ドイツの訪問団の通訳をつとめてもらった人に、通訳として同行してもらおうかお願いしたが、急に都合がつかなくなってしまうた。麓に宿をとって

一抹の鬘気を纏ひ避暑帰り

光年てふ熟し光や夜の秋

目黒吟行

楽譜碑の一節より翔つ蜻蛉かな

思惟尽くす胸穴羅漢涼新た

のみ槌の彫僧禅師秋立てり

眉間皺濃ゆき羅漢と夏惜しむ

いたので、急遽私の妻と娘の麻衣が同行してくれることになった。

もしトニーと私の二人で行ったなら、車の中は無言のままの旅になるところであつたが、娘の麻衣はローゼンハイムを一度訪ねたこともあり、会話までは行かなくても手振りも交えて意思の疎通を図ることが出来た。登山の前日はトニーと私の家族で富士吉田の「御師の家」と言う料理屋に行つた。ここのご主人に富士登山のレクチャーをしていただいたが、会話がうまくいかない様子を見ていて、隣に住むドイツ語の出来る人を選んできてくれた。

翌朝五合目までのバスを見送つたが、五合目がどしゃ降りの雨であつたのでトニーはすぐに引き返してホテルに戻つて来てしまつた。結局は新幹線に乗せ京都の一団と合流させることにした。

私も今の体力では富士登山は無理と思つていたが、「御師の家」の主人の話を聞いて昔のような行程ではなく、時間をかければ必ず登れると言つてくれたので、少し自信を取り戻した思いで、何年か先には富士登山に挑戦してみたいと思うようになった。

能村 研三

蒼茫集



黙礼の門

辻美奈子

僧ひとり黙礼の門雷兆す
ひたひたと猫が水飲む半夏生
ピーマンの中のみづみづしき山河
蛇の子を逃がして来いと言つたはず
自分しか信じぬひとの白日傘
虹消えしあたりの空の素つ気なし

夕風

大川ゆかり

十円玉にリボンがひとつ鳥の恋
小満や手に納まりの良き器
薬局のまはり明るく梅雨深し
桜桃忌駅に集まる傘の色
新船の名前は「絆」大南風
夕風を編みたる烏瓜の花

心音

細川洋子

しほさみは海の心音籐寝椅子
牡丹の迷宮咲きと思ひけり
白日傘翼を畳むやうに閉づ
双方の言ひ分を聞く冷房裡
油照箸を上げてでも下ろしても
滝落ちるさみしさ時に束となり

異界の音

藤原照子

万緑や湖一枚を埋め残し
耳鳴りてふ異界の音や星涼し
くちなしの匂ひ地震とも目眩とも
緑蔭の和太鼓若き桴さばき
象鼻杯とや蓮酒にすこし酔ひ
俄杖拾ひ雪溪めざしけり

所化の墓

菅谷たけし

常識といふ束縛の時計草
がんに負けじと癌詠む君へ梅雨明くる
白靴の一步軽くてよき予感
山蟻のまつくろにして野武士めく
夏草や机並びに所化の墓
青田波世に葬列といふも消ゆ

眉 間

荒井千佐代

朴咲くやいよよ鶏冠鮮やかに
一と匙の蜂蜜重し麦の秋
木の洞へ満つる潮鳴り芙美子の忌
梅雨深しうさぎの眉間撫でてやる
宵祭はじまる潮の満ちて来し
いま西日涉り終へたる被爆川

ぼろんかづら

北川英子

船笛の行き交ふ海霧の深みかな
上席の僧待つばかり夏座敷

ついついの長居にぼろんかづらかな
辛うじて心折れずに茄子を焼く
小児病棟七夕の願ひごと
二人とはいつかはひとり人夕焼

七月の月

辻

直美

ずぶ濡れで子がくる浮輪抜けさうな
短夜や思ひ出のみな寸詰まり
七月の月を淡しとおもふかな
帰省子へ手を振る役目残さるる
晩年は夕焼に似てすこし映ゆ
よく晴れて鬼灯市の日暮なり

筒 抜 け

千田百里

見えてゐて音なき滝を目差すかな
木の間経て海へ筒抜け夏座敷
石庭に波音探る端居かな
実梅挽ぐ大黒さんのスニーカー
永遠のモンローウオーク通し鴨
祭終ふ酒徒も酒仙も疲れたる

水の性 千田 敬

平らなる水の性捨て男滝かな
麻服の皺ほどうれひなき齡
地震あらば螢袋に逃げ込まむ
字余りと言ふべし鼻のサンガラス
日めくりの格言も剥ぎ朝曇
寅さんに会ふと出てゆく鰻の日

業平忌 安居正浩

かき氷崩すあひだは海を見て
業平忌夜の雨音を聴いてゐる
紫陽花の波打つところ飯場あり
向日葵のうつむきがちもありにけり
夏落葉水面に鯉の背の走る
虎の尾の少し震へる雨となり

水眠る 田所節子

水に溶けたくて海月の裏返る
体内の水まだ眠る朝曇
コピー紙の梅雨の重みを抱へをり
形代を流す岸辺を幣囲ひ

薔薇園の香に酔ひ少し喝きをり
手で開けて電車を下りる麦の秋

先陣の風 松井志津子

あぢさゐや白はしづかに深き色
うつとりと飢ゑてゐるなり蟻地獄
香炷きて己に甘く梅雨籠る
街路樹に先陣の風神輿来る
夏怒濤画紙とよもして童画展
蟹路地に干さるる昨夜の踊衣

雨の重力 楠原幹子

噴水や中途半端な待ち時間
絶対も完璧もなし雲の峰
万緑に雨の重力加はれり
人影のなくて湖畔のハンモック
博多山笠男が男発散す
仲・伊藤貴様
九十年を存分に生き大夕焼

炎 暑 高橋あさの

風向計物憂くまはる炎暑かな
凌霄花盛りて一日疲れをり
線路づたひ歩みし記憶雲の峰

激情とやさしさ具ふ滝の水
倒木に苔生えてゐる涼気かな
蛇の衣すこやかな過去吹かれをり

黒 船

宮内とし子

黒船の史蹟残して小鱈干す
南風吹くどこへも行けぬ水川丸
紫陽花に遠景の海紛れたる
野球部の荷物どかつと駅薄暑
釣堀に訳ありの面並びをり
螢火や消えて心にともるもの

梅 雨 夕 焼

鈴木良戈

近く雲の溜まる海坂梅雨夕焼
浜木綿や霊塊ゆるく沖へ行く
あめんぼう陽射しに速さましにけり
緋を縫りて登る朝顔相撲部屋
箱庭に雪洞一つ加へけり

白 神 山 地

大畑善昭

白神の万緑山中われは侏儒
滴りや樵は古武士の相に立ち

白神の奥へ肺腑もみどりなし
樵涼し迦陵頻伽もみ空には
猿と眼が合ひ暗緑のぶな林
青嵐は浪か炎か谷から峰

昼 花 火

上谷昌憲

青蔦にがんじがらめの式守家
草笛の出来たての音愛しめり
赤煉瓦倉庫黒ずむ送り梅雨
暮れて雨十葉の白またたくよ
迎火や路地に風涌く佃島
自転車を磨く取的昼花火

道 を し へ

河口仁志

海開き出口一つの臨時駅
人待つて待つて噴水見飽きたり
忘れたきことあり遠く泳ぐなり
葬列の後に躓きくる道をしへ
昼寝にはほどよきところ仏間かな

潮鳴集



生たまご

齊藤 實

かき氷前頭葉のうろたへて
明易しこけしは細く眼を開けて
あぢさゐのやうな灯のつく夜の新塔
鵜篝の果てて闇夜のなまぐさし
四方六千日生たまごを割る

ジェットタオル

甲州 千草

ぎんぎんに冷やす父の日のグラス
男梅雨ジェットタオルの大きな音
水乾く音が青葦擦れ合ふは
化粧水の無色涼しきたなごころ
電光も雷鳴も呑む夜の川

握手

菊地 光子

再会の握手は両手星まつり
立葵小さき石に躓きて
ぶうらりと垂るる草砥や五月闇
噴水に風の軽みの散華かな
舞ふほどに闇うるほひぬ初螢

シェークの肘

安藤しおん

あかときの靄山百合の蕊ひびく
巴里祭シェークの肘は音刻み
蠓蠓のかたまり薄暮移し替ふ
「死に体」のやうないち日冷奴
パナマ帽父に頼母子講の頃

沖作品



能村研三選

金星がよぎる夏日の艶ぼくろ

東京

磯貝 尚孝

浅草に田んぼのむかし泥鰯鍋

真打のおもむろに脱ぐ夏羽織

太梁に煤のいろ濃き迎へ梅雨

噴水や程なく昼のコンサート

溽暑なり亀の甲羅の重からむ

水琴窟天平の世の水涼し

嬰抱く木喰仏や風涼し

端然と化石の生家河鹿鳴く

点字句碑夏鶯に耳澄ます

螢火の螢火追うて恋迷路

夢の続き見むと忍びぬ木下闇

下闇に居りぬゴドーを待ちながら

木洩れ日に音くつきりと岩清水

けもの道途絶えて光る泉あり

長崎

東島 若雄

静岡

東 良子

朝風や磯の香りに事たれり

武具飾る四角四面の父想ふ

山の端にちぎれ雲ある夕端居

雨雲のたなびきてゐる夏野かな

大滝の時をりしぶきふとらしむ

夕焼や昭和の町が透きとほる

風鈴やとなりどうしの難しき

ごきぶりといふもの神が創りけり

情報のひろがりひろがり雲の峰

きれいごとばかり並べて水中花

焦げるほど力漲る余り苗

青梅の熟るる一劃水敏し

たんぽぽ黄師弟の絆とはにあれ

眼帯の中に梅雨蝶追ひもして

睡蓮や眠りかけたるバギーの子

茨城

岡澤 田鶴

岐阜

花田 心作

アメリカコロイチ

鈴木 一広

沖作品 15句選評

*
能村研 評

浅草に田んぼのむかし泥鰯鍋 磯貝 尚孝

「沖」の五百号記念大会が終ってから、有志で打ち上げを兼ねて泥鰯鍋を食べに行つた。浅草には「駒形どぜう」「飯田屋」など有名である。泥鰯屋さんのルーツはよくわからないが、両方の店は江戸時代からの歴史があるのだろう。泥鰯は蛋白質が手軽にとれる食材であつたようだが、浅草あたりも泥鰯のいる田んぼが広がっていた時代があつた。浅草には今でも料亭の名前に「浅草田圃」という店があることからも昔の様子が伝わってくる。

端然と化石の生家河鹿鳴く 東 良子

先月から俳壇でベテランの東良子さんから投句をいただいている。化石とは村越化石さんのこと。化石さんは東さんと同郷の静岡県藤枝市に生まれた。十六歳の時、ハンセン病罹患が発覚し、離郷。草津町の国立療養所栗生楽泉園に妻と共に入園。

死と隣り合わせの時期を過ごしたが、化石の心のようにどころは俳句であつた。作者はその化石の生家を訪ねることが出来た。俳人としても崇敬の念を禁じ得ない感激が、静かな河鹿の鳴き声と共に伝わってくる。

夢の続き見むと忍びぬ木下闇 東島 若雄

何か不思議な句である。夢とは良い夢だけではない。怖ろしい夢もある。夢から覚めてしまった自分がこのままではいられず、この夢の先のつづきをどうしても見たい気持になつた。あの木下闇に忍び込んだらこの夢の続きが見られるかも知れない。夢とは不思議なものである。

武具飾る 四角四面の父想ふ 鈴木 一広

現在はアメリカにおられる鈴木さん。この句は鈴木さんがまだ子供の頃日本におられる時の思い出であろうか。五月になるとアメリカにいても五月人形や節句の武具がショーウィンドウに飾られることがあるのだろう。四角四面で厳格な父であつたが、五月人形を飾ってくれる時の父はやさしかった。

ごきぶりといふもの神が創りけり 花田 心作

ごきぶりが出現したのは約三億年前の古生代石炭紀で、「生きていた化石」ともいわれた。古生代から絶滅せずに生き残ってきたことから「人類滅亡後はごきぶりが地球を支配する」と言われるほどだ。そうなると、人間から嫌われるごきぶりも神が等しく作られたと考えてもよさそうだ。(以下略)